

---

# ぜんぶネタバレ

黒木露火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぜんぶネタバレ

### 【Zコード】

N6455M

### 【作者名】

黒木露火

### 【あらすじ】

改稿にあたつての試行錯誤の過程を晒してみます。  
自作語り乙！と思ってください。

## 0 間の名前　「」換拶にかえて

はじめましての方ははじめまして。

黒木露火くろき ろうかと申します。猫好きの怖くないホラー書きです。

私はこのたび、過去に書いた小説を改稿しようと思いつ立ちました。このエッセイは、その試行錯誤の記録になる予定です。

他の小説書きの皆さまの参考になることが何があるかもと、このとで、その悶絶模様を晒すことにしました。よろしければご笑覧ください。

黒木露火というPNは数年前から使っていますが、これに決定するまでには糺余曲折ありました。

命名に至るこを、とりあえず自己紹介がわりに聞いていただきましょう。

そもそもは、ある実話怪談のコンテストに出してみようと思つたのがきっかけです。

そこで、母にペンネームの命名を頼みました。母は以前、印鑑のセールスをしていた関係で、姓名判断ができるのです。

どうせなら画数はいいほうが多いじゃないか、というくらいの軽い気持ちでした。

ところが

命名「美奈月みなづき　青空せいか」

青空だよ！　晴れ渡つてるよ！

どこの宝塚、もしくは少女小説家だよ！

とおひさまに向かつて叫びたくなるほど爽やかさです。

「あれや……、実話怪談のコンテストに出すんだから、もつりょつ

と『闇』とか『円』とか『黒』とか、そういうダークなイメージで頼むわ……」

「はいはい。ダークな感じねつ」

母の軽い返事に、多少の不安を感じましたが……。

(再) 命名「黒月 くろつき 魔犬 まけん」

……人間じゃないデスヨ、マン。

前々からそういう気はしていたのですが、うちの母は超絶的にセンスが悪い。これじゃギャグにしかならん。

「あれ……」

「今度はちゃんとダークな感じでしょっ? 『魔』とか、ご注文の

『黒』とか『月』も入ってるしつ」

「それはそつなんだけど、もうちょっとと違つやつを……」

言い淀む私を母が遮ります。

「えーっ、めんどくさい。あんた、自分で考えなさいよ。字画はそれそのまま使えばいいはずだから。あたしも忙しいのよっ」

これ幸いと辞典と首つぴきでいくつか候補をピックアップし、友人たちに相談した結果、決まったのが現在の「黒木露火」であります。おかげをまで「いいPNですね」と言つてもらえます(たまに)

ちなみに、ここに挙げたPNの「黒月魔犬」は、「HロHロ18禁ノベルを書くときには非使いたい」という奇特な方がいらっしゃいましたのでお譲りしました。

もしネットのどこかで見かけても、「あ、黒木ってこんなエッチなの書いてるんだ……」と赤面しないでください。断じて当方の作ではありません。

## 1 未完結作品量産者からの脱却

初心者の例に漏れず、私もやたら長編の構想が浮かび、最初だけ書いて放りっぱなしの未完結作品専門の書き手でした。

それからしばらくのブランクの後、短編を書き始めました。やつと完結作品を書くことができるようになつたのです。

短編を書くことによって学べることが多いです。

短編であれ長編であれ、完結させることで上げられる経験値は大きいからです。

それは構成力に関する経験値だと私は考えます。

私は普段はあまりラノベは読まないのですが、何冊かは読みました。

文章は薄いです。どのくらい薄いかといつと、通常は文庫本で1時間100ページの読書速度の私が、100ページ30分で読める。つまり、濃度は2分の1（当社比）。描写はかなり足りません。でも、構成力はあるんです。

その他にも、「池袋ウエストゲートパーク」（1巻）を最近読み返してみました。

ネタといい、ぶつ切れの文章の雰囲気といい、かなり携帯小説っぽいのに、自分が過去に読んでみた携帯小説とはまるで違う。どこが違うんだろうと考えながら読んでいました。やっぱり構成がしっかりしているんです。

つまりは、構成力。

プロのプロたる所以はそこなのでしょう。

実際、文章だけが上手いという人は、ネットにはじりじりいますよね。プロになる条件が純粋に文章力だけならば、もつとプロ作家

の人口は多いのではないでしょつか。

文章力というのは、技術による部分も多いので、少し注意して書くようにすれば上達します。

しかし、構成力というのは総合的な評価なので、とにかく書き上がつてないと、その作品についてきちんと評価することはできません。その評価をふまえて反省することもできません。

構成力は書き上げることによってしか経験値を上げることはできません。

趣味で書いてるんだから読者なんて関係ないという作者なら、別完結させる必要はありません。自分のためだけに書いてる人には関係のない話です。

ただ、提供されるものが有料であれ無料であれ、大抵の読者は物語の終焉とそれとともにたらされるカタルシスを求めているのではないでしょか。それならば、どんなに途中が面白くても、完結しない作品は読者にとって意味がないのです。

自分もたどつてきた道だからこそわかる、やたらと連載が中途で止まる　というより、作品を完結させたことがない人には、気力的にも技術的にも完結しやすい短編から始めるをお勧めします。

小説書きの世界には、「生まれながらの長編書き」と「それ以外の人々」がいます。

身の回りの前者と思われる人々に聞き取り調査をしたところ、彼らは処女作から脳内プロットだけできつちり完結させることができるようです。

もし、初めて書いた（おそらく長編構想の）一一本が完結できない人は、「それ以外」のほうです。どんなに雄大な物語が頭に浮かぼうとも、今、それを書くのは止めた方がよいです。間違いなく無理だから。

さあ、同志、「それ以外」の人々よ。  
まずは短編から始めよう。

## 1 未完結作品量産者からの脱却（後書き）

「池袋ウエストゲートパーク」の作者・石田衣良さんはもともと「ピーライターなので、ぶつ切れっぽい文章に見えて、もの」との本質を捉えるような、非常に印象的でセンスのよい言葉遣いをされていいるということを補足しておきます。

## 2 そして、落とし穴にはまる

いじりして、短編を何本か書いた後、初めての長編を書くことになり落とし穴にはまりました。

書き始めてしばらくした頃、何かがオカシイといつて気づいたのです。

なんだか話が平坦で、盛り上がりがないような……？

そこで、知り合いの長編をよく書いてる作者さんたちに相談してみました。

【長編は、起承転結の各エピソードの中に、更に起承転結を入れなければいけない】

考えてみれば当たり前のことですから、普段から長編を書いてる方は、何を今更とおっしゃるかもしれません。

私は短編をそのまま長く書きさえすれば長編になる、と思い込んでいたのです。

そりや、単調な展開にもなりますわいなあ。

作者のテンション、激萎えです。

そんな状況でも、幸いなことになんとか完成にこぎつけたことができました。

それは、プロットがあつたからだと思います。

あらかじめ作つておいたプロットに沿つて、ただ書き続けることだけに集中して、完結させることができました。プロットがなければ、間違いなく挫折していたことでしょう。

私自身の場合だと、プロットが脳内にある限りは変更がきくと自分自身に甘えてしまい、却つて落ち着かず、ふらふら迷つた挙げ句に書き続けることができなくなってしまつのです。

一方、根っからの長編書き、生まれついてのストーリーテラーミたいな人は、脳内プロットだけで長編を完結することができます。なんとなくとか無意識で貼つておいた伏線を、物語のラストでも手品のようにきつちり回収しやがるんです、やつらは。その分、無駄になる伏線も多いという本人談もありますが、ともあれ羨ましい才能です。

オンラインで作品を発表している人の作品リストを見回したとき、未完結（放置）作品のほうが目につくということは、そんな風に「生まれながらの長編書き」の能力に恵まれてるのは、小説書いてる人たちの中でも多くはないということなのではないでしょうか。よく、展開に悩んで書きが書けないとおっしゃる作者さんがいらっしゃいますが、そういう方は「生まれながらの長編書き」ではないでしょうし、最初でプロットを作つてあつたらそつこうともないと思います。

私も、未完結作品を量産していた頃は、プロットは作つていませんでした。脳内プロットで十分だと考えていましたからです。今でも、短編を書くときは脳内プロットのみです。脳内プロットで制御できる規模でないと、短編としてはまとまらないようです。

しかし、今回初めて長編を書いてみて、自分には長編を脳内プロットで書き上げることは無理だと悟りました。

並行して走る複数のストーリーライン、伏線の敷設と回収 プロットにこの全てを詳細に書き込むわけではないですが、簡単な箇条書き、あらすじ程度のものであつても、一度脳内から出すことによつて落ち着くように思います。

「生まれながらの長編書き」のように曲芸みたいな書き方はできなくても、そういうことができない人間にはできないなりの、魅力的な長編のスタイルがあるはずです。

それは、きつちり練つた設定、無駄のないエピソード、物語の終焉に向けて張り巡らされた伏線でかつちりと組み上げられた作品ではないでしょうか。

曲芸は本職に任せて、それができない私たちのような人間は、ひたすら地道に考えていくのではありますか。

### 3 いじになりたい。（1）

いじのような経緯で書かれた私の初めての長編「緑の冠」は、色々と残念なことになってしましました。

一年近く経つて、どこがまずかったのかも少しづつわかつてきましたので、改稿しようと思い立ったわけですが、改稿作業に移る前に、まず小説書きとしての自分について棚あらしをしてみたいと思います。

私は、「小説家になろう」ではと断りを入れるまでもなく、ネットの底辺をうろついてる趣味のオンライン作家の一人です。信者やファンなんていませんし、感想も滅多にもらえません。

マゾい作者なら、「 Bieber オレの書くものなんかつまんないから感想もらえないんだよ～」と血虐プレイに走って快感に打ち震えるのかもしれませんが、「どちらかというと」「むしろ総攻」などその手のテストで診断されることの多い私の趣味ではあります。

冷静に判断するなら、思わず感想書きたくなるほど面白いわけでも、しつゝミ入れたくてたまらなくなるほどアレでもないと、そういうことなんでしょう。

自分の作品があまり面白くならない理由の一つに、「山場が作れない病」が挙げられるかと思います。ふと気がつくと、患っていたのです。

短編ならヤマ＝オチに見えるのでなんとなく「まかせても、長編はもうはいきません。『緑の冠』ではそれを思い知りました。

この話では、作者想定の山場は一力所あります。そのうちの後ろのほうの山場が話全体の山場になるはずだったのですが、盛り上げきれませんでした。

読み終えたときの、スローンと突き抜けるようなカタルシスは、きつちり作つてある山場からこそ、もたらされるのではないですか。

今回はそのあたりを考えながら、改稿していきたいと思つています。

さて、欠点だけを取り上げてそれを改善していつたら、面白い作品になるのでしょうか。

私はならないと思います。欠点のない作品と面白い作品はイコールではありません。

それでは、面白い作品とはどんなものでしょうか？

いろいろな作品を読んでみたところでは、魅力のある作品です。欠点は少ないほうが望ましいが、あってもそれが気にならない、そんな魅力のある作品は強いです。さらに言えば、作品の魅力と長所は合致することが多い。

欠点を改善する努力と一緒に、長所を伸ばす工夫も必要だと私は考えます。

作品における長所は、書き手にとつては武器なのです。自分の武器は何なのか明確に自覚し、意識的に使つことによつて、もっと魅力的な作品を書けるようになるのではないですか。

#### 4 じはんになりたい。（2）

それならば、自分の武器ってなんだ？ と考えてはみたものの、わかりませんでした。

というわけで、読み専のリアル友人に聞いてみました。

「誤字脱字とか変な日本語はないよね」

……つてリア友某よ、それ、長所じゃありませんがな。

誤字脱字は推敲すればほぼ取り除けるし、趣味・読書の人間が日本語おかしかつたらただのザル頭でないかい？

「…………他になんかない、かな？」

「ほか？ ううん。あ、最後まで読めるとか？」

最後まで読めるって……それ、長所か？ それになぜ語尾が疑問型？

ありがたくも手厳しい友人の言葉に、私は落ち込みました。たまにいただく感想でも、同じようなことを言われます。曰く、

「誤字脱字がない」「読みやすい」。

文章だけで書いた人物を特定できるような、特徴的な文章は魅力的だし目立ちます。でも、私が書きたいと思って日々努力しているのは、水のように無味無臭な、これといって特徴のない つまりは読みやすい文章です。

読みやすく書こうとしているんだから、「読みやすい」と言われるるのは当たり前だと思っていました。そして、それは決して武器にはならないのだと。

しかし、誤字脱字がない、読みやすいだけの文章も、立派な武器になります。最後まで読んでもらえることができるからです。

作品を最後まで読んでもらうことがいかに難しいかは、自分自身がオンライン小説の読者である方ならわかつていただけると思います。

誤字脱字が多くつたり、文章作法が守られていなかつたり、文章

の意味がわかりにくかったり流れが悪かったりする作品は、内容が面白くても読み進めることができないこともあります。

オンライン小説を評価する場合、最後まで読めるか読めないかと いうのは重要なポイントです。とりあえず最後まで読ませることができるのは、それなりの武器であると考えてもよいと、現在では思っています。

ただ、贅沢を承知で言わせていただければ、自分の作品は、そうめんみたいだと思うんです。つるつるーっと入っていつて、あっさり終わって、後はなにも残らない。

妙に後を引くものよりは、一時的な暇つぶしや気分転換になるようなものを書きたいので、ある意味望んだとおりといえばそうなんですが、そうめんは夏限定ですしね。それに、アレンジがきかない。せいぜいにゅうめんかソーメンチャンプルくらいですか。

メシツブだつたら、年中喰つて飽きも来ない。

そういうのが本当は理想です。

白飯、おかゆ、雑炊、炊き込みご飯、すし、きりたんぽ、炒飯、ピラフ、ドリアと、ご飯のほうがアレンジも効きますしね。

そうめんからごはんになれるように、がんばりたいと思います。

## 6 テーマについて、もう一度考えてみよう（一）

「緑の冠」は、十五年ほど前に元ネタができました。当時考えていたSFのシリーズものの、スピンオフという形で、本編の主人公は、作中にちらりと出て来るカラアゲ好きの童顔探偵でした。

設定は作ったものの、本編のネタを考えつかないうちに年月が過ぎ、古くに作った話のため多分に「病的要素を含んでいて、一生書くことはないだろうなあ」と思っていたところ、空想科学祭2008に参加させていただくことになりました。

読むほうとしてはSF好きでも、ホラーばかり書いていた私にとって、SFは処女地です。

考証のしつかりしたSFは、付け焼き刃の知識では到底無理。他の方はまともにSFを書く方ばかりだろう。となると、他の人とは違う切り口でいくしかありません。

ならば、「ハートウォーミングなホームドラマ」で攻めてやろうじゃないの！

ということで昔のネタであるところの「緑の冠」を引っ張り出してきましたが、結局間に合わず、2008年は得意のホラー・ティストのサイバーSF短編「リアルライフ」をアップしました。

こちらもいろいろと悔いが残る作品なので、そのうちに改稿をと思っています。

「緑の冠」も一応途中まで書きかけていたので諦めきれずにいたところ、空想科学祭2009を開催するとのことで、そちらに投稿するつもりで書きました。

結局、2009年の締切にも間に合わず、選外扱いになつたのですがね。スケジュールを甘く見積もつたゆえの自業自得です。

にしろ参加作品数の多かつた空想科学祭2009。

ちゃんと締切を守つた作品は読まれますし、たくさんのレビュー

もつきますが、破つて選外になつた作品はレビューいかが読まれ  
もしません。「緑の「冠」も例外ではありませんでした。

そんな中でも読んで下さり、感想までくださつた方々には、いく  
ら感謝しても足りないくらいです。

この場を借りて、お礼申しあげます。

## 7 テーマについて、もう一度考えてみよう（2）

最初に想いついた十五年前のネタと今回出来上がった「緑の冠」の間には大きな違いがあります。

それはテーマです。

十五年前は「親子（特に父子）関係」がテーマでした。

それも重要なテーマの一つなのですが、今回は、「人はひとりで生きているのではない」ということが一番のテーマになりました。

私の場合は構想時と執筆時でテーマが違っているだけで、執筆時のテーマで書き上げましたが、何年間にも渡つて長い物語を書いているとい、作者の中でテーマも変わつて行くことがあるかもしれません。

しかし、同一の物語では、そこにはブレないほつがよることは間違いないでしょ。

逆の考え方をするなら、数年がかりになる作品を書くなれば、ブレンないものをテーマに使ってくる必要もあるのではないか。どうか。

「テーマを読者にどう伝えるか」についても、迷つところです。直球でわかりやすく訴える方法もあれば、わかるかわからないかのさりげなさでテーマが描かれている作品もあります。どちらがより優れているというわけではありませんし、テーマなんだから是が非でもわかつてもらわなければならぬいかといつ、そういうわけでもないと私は思つのです。

年齢や経験によってわかることもあればわからないこともあります。そのときはわからなくても何年も経つて「あの話はこうこう」とだつたんだ」とわかることもあります。そういう体験もまた、読み手にとつては貴重なものです。

ただ、読者に理解されなくとも、作者の中でだけはテーマは確固としてあるべきです。テーマのない作品、テーマが作中でこうこう

変わるものとは、話が「下る」からです。

例えば土の上を歩く動物も、軸である骨がなければまっすぐ歩くことはできません。

テーマは物語の軸です。軸のない、あることはなんだ物語なまら、読者のもとへ届けることは難しくなるでしょう。

ところで、「テーマは一つであるべきだ」という話もあります。それによるならば、「親子関係もテーマの一つ」という私の言い方はおかしいことになります。

確かに一番のテーマは向なのかは一つに絞るべきであるし、そこから話をぶれさせんべきではあります。が、順位を落としたものをサブテーマとして設定することせ、話に奥行きを出すためにも良いと私は思います。

ただし、短編ではこれをやると盛り込みきれずに却つて散漫になるので、メインテーマを一つ、サブテーマがあつたとしても一つくらいに抑えたほうがよいのではないかでしょうか。

## 8 サブテーマについて語る語る（前書き）

今回は自作語りがメインです。興味のない方はスルーしてください。

「緑の冠」でサブテーマとして設定していたのは、まず「父子関係」。

そのために3組の親子を登場させています。

コーディンとクリスといつ、和解する（疑似）父子。  
トーマスと彼の父は、過去の不和を乗り越えて、現在では互いに  
独立した個人として相手を認め合いつつある父子。

コーディンとその父レットは、永遠に和解する」とも理解し合いつ  
ともないだらう父子。

親子関係で悩んでるお悩み相談なんかで、（立場という意味の）  
子どもであるところの相談者に「あなたがまず親御さんを許さなけ  
ればいけません」とか言つてるアドバイザーがいたりしますけれど  
も、私自身はそつは思いません。許せるなら許せばいいし、許せな  
ければ無理して許さなくともいいのです。まともなカウンセラーな  
らそういう言つてくれるんでしょうけどね。

次にクリスと母親エレンの「母子関係」。

ずいぶん一方的にエレンを悪者に書いてしまいましたが、彼女は  
無知な部分もあつたりしていろんなことを諦めていた人で、実際は  
それほど酷くもない母親です。子どもを殺したり、放置や暴力で死  
に至らしめたりしてゐるわけじゃないですし、クリスもなんだかんだ  
言つて母親のことは好きでした。

母親にももちろん悪い部分はあつたのですが、精神的に少々早熟  
なクリスは反抗期まつさかりといつこともあり、「正しくない母親」  
であるエレンを認められない部分が大きかったといつていいでしょ  
うか。

そもそも「正しい母親」というのが、所詮子どもの幻想なんです  
けどね。

母親のこと好きなんだけど、それを認められない、そのことを十分に表現できていたとは思えません。ここは改善すべきポイントだと反省しています。

その次に、お互いのことを大切に思つていてるのに、どこかすれ違つている人たち。

自分では家族になれないからと、コーポリンに家族を望むトーマス。トーマスを家族だと言いながらも、他人だから実際は家族ではないし、どんなに大事に思つていても友人にすぎない彼が、自分の家族を作るためにいつか自分の元から去つてしまつことを淋しく思いつつも、そうなつたほうが幸せだからとそれを望むコーポリン。

コーポリンよりトーマスのほうが単純なので、コーポリンが彼に直接「君のことは家族だと思っている」って言つてしまえばそれでまとまる話なのに、コーポリンはトーマスの父親とも仲が良いこともあって、実際の家族を差し置いてそんなことおこがましくつて言えない。あるいはこの一人、恋愛的にくつついちゃつたほうがよかつたのかもしぬせんが、それも理由あつて無理。

コーポリンとトーマスのそれぞれの望みはクリスによつて補完されるわけです。

クリスが男の子だつたら、真のハッピーエンドは訪れないということで、やはりクリスは女の子でなければいけないのです。

## 8 サブキャラクター登場の話題（後編）

「緑の冠」の改稿にあたってアドバイスなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。参考させていただきます。

## 9 アンビバレンツな反応と感想（1）（前書き）

今回は自作語りがメインです。必要のない方、興味のない方はスルーしてください。

## 9 アンビバレンツな反応と感想（1）

改稿するにあたって改変すべきか悩んだ点として、主人公の性別の問題があります。

主人公のクリスは男の子のよつな一人称で服装です。

守つてくれる大人のいない場所で危険を避けるための知恵、という説明を作中ではしています。それとは別に、番外編でクリスの性別を開示して、それまで読者が想定して読んでいたストーリーラインを一部ひっくり返し、クリスの初恋の物語としての構造を改めて浮かび上がらせるという作者の思惑がありました。

番外編で「やられた！」と読者に言わせるために伏線を張り巡らせてあつたつもりでしたが、気付いた方は少なかつたようです。そのため、読者の中にはこれをアンフェアと感じた方もいらしたらしく、「不愉快」との感想を曰にしました。

クリスとコーディンでトーマスを取り合つて、「うB」的三角関係を希望して、「番外編のオチはないほうがよい」と言つてのけた友人もいましたが、そういう腐つた意見はともかく。

「そもそもクリスが女の子である必要も（読者にとつては）ないし、そのことによつて不必要に読者を混乱させるのはよくない」という真面目なご指摘もいただきました。

作者としてはクリスは女の子として造形したつもりでしたが、「クリスは男の子の性格であるから、実は女の子というオチには無理がある」というご意見もありました。

一方、「最初から女の子のつもりで読んでいた」「男の子にしては違和感があると思つていていた。女の子だというので納得できた」というご意見もありました。

「緑の冠」はクリスが男の子でも成立しうる話です。

クリスが男の子のような服装や外見をしているのは、生まれ育つ

た治安の悪い街で自分の身を守るために、この理由を提示していましたが、改めて考えたら、それが一番の理由ではないような気がしていました。それで、説得力に欠けてしまったのかもしれません。

身を守るためという実用的な理由の他に、クリスは積極的な意味で男の子になりたかった、というより女の子でいたくなかったのでしょうか。

女性として一番身近なモデルとなるはずの母親がどうしようもない女で、そんな風にはなりたくないと思つても、彼女の血をひいている限り、そして生まれ育つた街にいる限り、その運命から自分は逃れることができないんじやないかという恐怖が、主人公にはあります。同時に、自分が男の子だったらもつと母親にも優しくできて、上手くやつていけたんじやないかという後ろめたさもある。

特に、母親のような、ネガティブな意味で女性的な女にはなりたくないという恐怖は強かつたはずです。だから、女（の子）らしい服装やふるまいを拒否する。これらの理由のほうが説得力があるような気がします。

このあたりをもつとちゃんと盛り込めたらよかつたかもしだせん。

ここも今後の改善点としたいです。

それから前回で述べました通り、クリスが女の子であることによつてヨージンとトーマスの関係は完全なものになります。クリスが男の子だったらこのように上手くはおさまらないので、やはり女の子で正解なのだと改めて思いました。

## 9 アンビバレントな反応と感想（一）（後書き）

「緑の冠」の改稿にあたつてアドバイスなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。参考にさせていただきます。

## 10 アンビバレンシな反応と感想（2）（前書き）

今回は自作語りがメインです。必要のない方、興味のない方は  
じましてください。

## 10 アンビバレンツな反応と感想（2）

私はどんでん返しのある話が好きです。

自分自身が思い込みの激しい性質であるため、だからこそかえつて、固定観念や思いこみを覆されるような作品が大好きです。

映画や漫画などもそうですが、特に内面を濃く描くことのできる小説は、自分とは違う視点や視野から物事を見たり考えたりするよい（疑似）体験にもなります。

しかし、世の中には自分とはタイプの違う読者も当然存在する。そのことは頭ではわかっていたつもりでしたが、「不愉快」との感想を目にしたとき、私は動搖してしまいました。誰かを不愉快にさせるために書いた作品ではなかったからです。つまらないとか下手とか、そういう感想だつたら受けとめられたと思うのですが。つまりは、その読者の方の予定調和的な展開から外れていたゆえの「不愉快」という感想のようですが、対する私も、自分の小説の読者の中にもそういうタイプの方がいらっしゃるとは思つていなかつたゆえの動搖ということになります。要するに、書き手として腹を括りきれてなかつたということです。

いろいろ考えてみましたが、私はこういう読み手であり、書き手としてもこういうスタイルが好きですし、これからもやつしていくと思っています。

「アンフェア」の一つ名でしたら、謹んで拝名いたします。

相反する読者の反応として、一部では非常に不評だった番外編の「クリスが実は女の子」というネタが、「クリスが将来トーマスと恋をする」という部分で、一部では非常にウケました。私の知る限りでは、ウケたのはすべて女性の読者です。

昨今はBL流行りなので、クリスが男の子でトーマスとくつくべとこうネタでもウケたような気はしますが。

いや、むしろわざわざのほうがウケたかもしれない。……しました。

「冗談はそれくらいにして、他の登場人物　トーマスについても、意見がきれいに分かれました。男性と一部の女性からは「ありえない」「嘘っぽい」と不評。残りの女性からはおおむね「癒し系」「優しくて素敵」と好評でした。

「緑の冠」のコンセプトは80～90年代前半あたりの「少女漫画」で、女性をメインの読者ターゲットとして考えていました。なので、トーマスも昔の少女漫画風フェミニスト青年にしてあります。小学生くらいの女の子が憧れるような王子様タイプといいましょうか。

だから、男性からみたトーマスの「ありえねー」という感想と、それとは反対に女性に好評だったというのも作者としては納得できます。

ちなみにコージンは、美形だけれども美形らしからぬ性格で、ちよつと不器用だけど実は気のいい普通のあんちゃん。男性からみてもあまり嘘っぽくないようを作つたつもりでした。幸い、彼に対しては今のところ特に不評は聞いたことがありません。

ただ、作者としては、最初はトーマスに好感、対照的にコージンには反感をもつてもらい、最終的にはコージンに好感をもつてもらえるようになれば、と思っていたのですが、トーマスが好きな女性は最初から最後までトーマスが好きで、コージンが好きな女性も割と最初からコージンが好きだった方が多かったようです。

これはちょっと想定外でした。女心つてわからないものですね……。

## 10 アンビバレントな反応と感想（2）（後書き）

「縁の冠」の改稿にあたってアドバイスなどありましたら、遠慮なくお聞かせください。参考にさせていただきます。

## 1.1 アンビバレンシな反応と感想（3）

相反する反応や意見、感想などをいただいたとき、作者はどうすればよいのでしょうか？

それらをどう作品に反映させていけばよいのでしょうか？

まずは、自分がどういう読者層を狙っていたのか（性別、年齢など）を再確認するのがよいと思います。

ネットでは年齢性別不詳のこともあります、できる場合は、その感想をくださった方が、どういう年齢・性別の層にあてはまるかを考えます。テレビの視聴者を年齢性別で分けるF1とかM1ありますが、そういう感じで。

それは、その方が自分の想定した読者層から外れていったら、参考にしないというのではありません。その層の読者はどういうことはどういう反応をするのか参考にするのです。わからない場合は、文章、語り口から推測し分析する。

これも、立派な創作修行ではないでしょうか。

世の中には、いわゆる荒らし的な感想を残す人もいますね。

最初そういう書き込みを見たときは、落ち込んだり、腹立たしく思えたりするかもしれません。

そういう人もじっくり分析させていただきましょう。

なぜそんな行動をとるのか、どんな人格なのか、知識レベルはどの程度なのか。

それを自分の創作活動に生かしましょう。

余談ですが、嫌なこと悲しいことがあつたときには「ネタになる」。その程度がひどければひどいほど「これはネタになる」。じついう発想の転換で人生の困難を乗り越えていきたいものです。

話が逸れてしましましたが、自分の書くものに対して、読む人がどんなことを感じるか、考えるか。ある程度の予測をもつて執筆にはあることは、必要だと思います。

そこでなければ、読者の反応を見越してストーリーを開拓し、伏線を張り巡らせるることは難しくなるからです。

同時に、どうじつ年齢や性別の人ほどどんなときにどんな反応をするか洞察した結果は、キャラクタ造形として作品にも生かせますし、それによってリアリティも出るのではないかでしょうか。

あるいは、女性向けの作品だからといって、登場人物のすべてが女性にしか共感されないタイプというのももつたいたい話です。

譲れない場合を除いては、読んだ男性読者から「こいつは友だちにしたい」とか「この子は彼女にしたい」と思えるようなキャラを出すと、作品自体も幅が広がり、面白くなるのではないかと思います。

次によりよい作品を作るためにも、いたいたい感想にはじっくり目を通し、自作と読者の分析に励んでいきたいですね。

## 1.1 アンビバレンシな反応と感想（3）（後書き）

参考サイト：Quick Order「テレビ業界専門用語辞典」

より転載

<http://www.quickorder.jp/yogojiten/>

F1 視聴率の集計区分の一つ。女性の20歳から34歳。男性の同年齢層は「M1」。

F2 視聴率の集計区分の一つ。女性の35歳から49歳。男性の同年齢層は「M2」。

F3 視聴率の集計区分の一つ。女性の50歳以上。男性の同年齢層は「M3」。

ちなみに、それ以外は「ティーン層」になるそうです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6455m/>

---

ぜんぶネタバレ

2010年10月8日14時28分発行